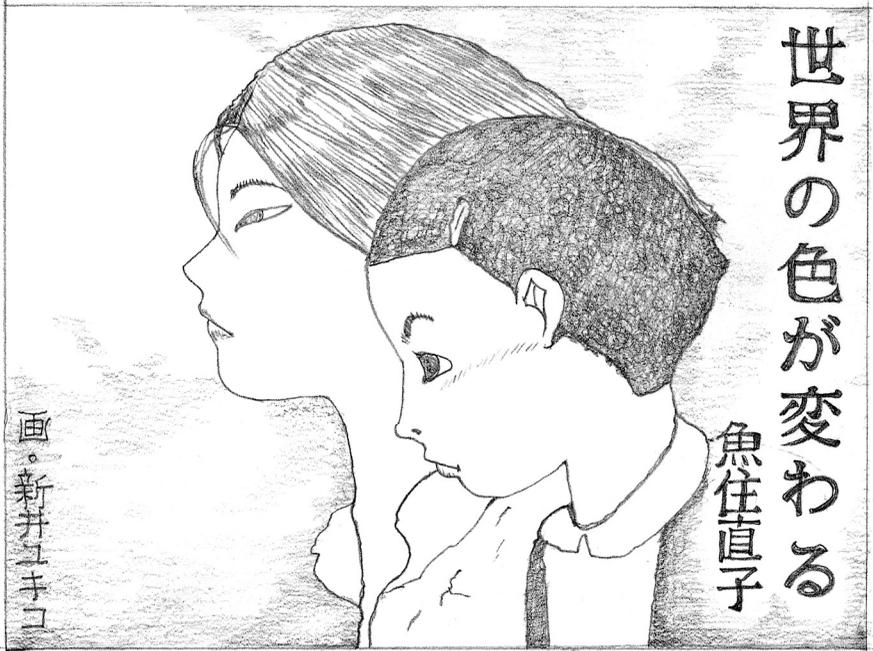


世界の色が変わる

魚住直子

画・新井ユキコ



エントランスを出ると、朝のつめたい空気がこちよかった。この夏は異常にあつくて、十月になり、やっとすずしくなったのだ。

私の住むマンションは、店が立ち並ぶにぎやかな通りのそばにある。でも朝はまだひとがすくない。このガラんとしたかんじも悪くない。私は学校の鞆をさげ、石畳の店通りを軽い足どりでよこぎった。

路地に入ると、ゾウのすべり台とベンチがひとつだけの小さな公園がある。ここをつっきるのが、学校へ行く近道だ。

公園のまんなかの地面に、雑誌をひきちぎったような紙が一枚、捨てられていた。カラー写真のページだろうか、背景が青くて、まんなか白い生き物っぽいものが写っている。

海のイルカの写真？ 通りすぎながら足をゆるめて見ると、イルカじゃなかった。青い布団かシーツのうえでからまっている、すっぱだかの一組の男女だ。

とっさに目をそらした。でも、すぐにまた見てしまった。両足をひらいた女の人のなかに、男の人のからだの一部が入っているのが見えた。

かーんと、頭をなぐられた気がした。

学校についても、まだクラクラしていた。見たものを忘